88140115

International Baccalaureate®
Baccalauréat International
Bachillerato Internacional

JAPANESE A: LITERATURE – STANDARD LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A : LITTÉRATURE – NIVEAU MOYEN – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A: LITERATURA – NIVEL MEDIO – PRUEBA 1

Monday 10 November 2014 (morning)
Lundi 10 novembre 2014 (matin)
Lunes 10 de noviembre de 2014 (mañana)

1 hour 30 minutes / 1 heure 30 minutes / 1 hora 30 minutos

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a guided literary analysis on one passage only. In your answer you must address both of the guiding questions provided.
- The maximum mark for this examination paper is *[20 marks]*.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez une analyse littéraire dirigée d'un seul des passages. Les deux questions d'orientation fournies doivent être traitées dans votre réponse.
- Le nombre maximum de points pour cette épreuve d'examen est *[20 points]*.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un análisis literario guiado sobre un solo pasaje. Debe abordar las dos preguntas de orientación en su respuesta.
- La puntuación máxima para esta prueba de examen es *[20 puntos]*.

© International Baccalaureate Organization 2014

次の文章と詩のうちどちらか**一つ**を選び、設問に沿って分析し、解説文を書きなさい。その際、二つある設問の両方に必ず答えること。

1.

鳥獣戯画という素敵な絵を社会科の教科書で見たことがあります。先生が黒板に私の名前を書いています。きしきしと音がして、私の名前は、もう既に、先生のはくぼくに踏みにじられました。指定された上履きを、まだ用意していなかったので、私は学校に来るお客さんが履くスリッパを履かされています。私は、本当はスリッパの中のばい菌が恐い。そればかりを気にして、下を向いて、足をもぞもぞとさせていると、先生は、幸福な思い違いをして、やさしく私の背筋を撫でてくれます。私は不思議な気持の良さが体じゅうを走るのを感じます。鳥肌がふつふつとたってきて、泣き声をあげなくてはと思い、ようやく前を向きます。教壇の上は、とても見はらしが良い。私は、新しいお友だちの顔をぼんやりと見下ろします。その時、私は、突然、耳が聞こえなくなります。皆、笑ったり、つつき合ったりしているのでしょう。口を誰もが、ぱくぱくと動かしていて、おなかをすかせた雛鳥のように見えます。

五年三組の新しいお友だちです。本宮杏さんと、みんな仲良くしてあげてください。先生は私のことを皆にお願いします。本当は、先生は私に皆のことをお願いするべきではないのかな。私には、こんなに大勢の人々の中からお友だちを選べるのですから。けれど、皆には、そんな楽しみがないのです。私を受け入れるか拒否をするか、その二つの楽しみしかないのです。

もとみやあん、もとみやあん。誰もが、唇を私の名前に形作っています。今にも大合唱が聞こえてきそう。けれど、私は、ぼんやりとそこに立ち尽くしているだけです。私は、この人たちを嫌っていないのだから、皆、私のことも嫌いにならないと良いなあ、と漠然と考えています。私は、嫌われないことが一番好きです。それが、とても楽なことだと思うからです。私は、私と同じ年齢の子たちに好かれるのが、とても面倒臭い。でも、嫌われるのはもっと嫌です。学校の生活がうまく運ばなくなりますから。学校での生活は眠る時間より長いのです。私くらいの年齢の子にとっては、一番、時間をかけていることが人生です。病気の子はベッドの中がその人の人生なのでしょうが、健康な私は、学校を人生にするしかないのです。

窓際の一番後ろに座ってちょうだいね、本宮さん。先生は、ポンと私の背中を叩きます。私は押し出されたシャボン玉のように、教壇を降りなくてはなりません。スリッパが脱げそうです。私は、足の親指を丸めて、それを防ぎながら床に降ります。弾みをつけて、教壇から飛び降りるのです。ぱん！と床は鳴ります。その途端に、私の耳は、良く聞こえるようになります。

あんって変な名前だよね。かわいいじゃん。勉強できっかなあ。お友だちの声が一斉に私の耳に飛び込んで来るようになるのです。その瞬間、私は自分が、ああ、学校のものになった、と思い途方に暮れるのです。

私が新しい学校生活に出会うのは、いつも春ではありません。学年の始まる春は、誰もが私と同じ立場なので、私には少しも新しい気持が起きません。私は、自分を特別だと感じません。特別でない自分を、いったい人はいつくしむことが出来るものでしょうか。

さいわいにして、私の父は転勤の非常に多い仕事に就いていたので、私は自分が他の大勢の子供たちと違うことを早くから知りました。自分と他人との区別をあっさりとつけてしまうことを学んだのです。

私が新しい学校に移るのは夏の終わりのことが多かったようです。一学期が終わり、私は教室の皆にさよならを言います。そして、うっすらと汚れた上履きを持って家に帰ります。これを洗って、また学校に戻るという面倒のないことが私を少し幸せな気分にします。時々、泣くお友だちもいて、私を驚かせます。私は別れを悲しませる程のことを彼女たちにしてこなかったのに。私は、思うのですが、気持は少し解ります。私といつも一緒にお手洗いについていた女の子は、ひとりでいかなくてはならなくなるのです。このことは、考えようによっては両親を亡くした時くらいに困ることなのです。手紙を書くからね、絶対にお返事ちょうだいね。私は、その子の言葉にうん、うん、と頷きます。でも、私は、手紙なんてこないことを知っています。その子の日常生活に、もう私は組み込まれていないからです。友だちというのは、日常生活なのです。遠く離れたところまで、わざわざ用を足しに行く人など、どこにいるものですか。

（山田詠美『風葬の教室』一九八八年）

（a）「私」にとって転校はどのようなものですか、解説しなさい。

（b）「私」と他の登場人物との違いはどのように描写されていますか、解説しなさい。

2.

ゆうぐれの冬

どうしてこんな小さな橋のきわなんかで
待っていると言ってしまったのだろう
そばのガードの上を過ぎる電車も
もう何度目かには灯がともっていた
ガードむこうの盛り場には
行きつけの暖かい店がいくらもあるのに
どうしてこんなうそ寒い所で
待ち合わせると約束してしまったのだろう
ぼくは盛り場が好きだ
ロシア料理店も朝鮮料理屋も好きだ
プラネタリウムも地下の映画館も好きだ
看護婦みたいな給仕たちのいるビヤホールが好きだ
本屋の棚にぎっしり詰まっている
若い娘たちのような新刊書を眺めるのが好きだ
鮮魚を客の鼻さきに積みあげて
joke のうまい板前のいる路地も好きだ
なにげない賑やかさや
たいして意味のない人だかりが好きだ
ぼくがいま待っているのも
ありふれた用事
ありふれた約束
ありふれた密会
人目につきそうもない狭い川が
ゆうぐれの音をたてて流れているのを
かわいい感じで聞きながら待っている
うすぐらい流れのなかに
ひと塊の芥のようなものが引っかかって
そこからはすかいに突き出ている
一本の竹の切れっぱしが見えるのだが
あれはどうして動かないのだろう？

（安西均『葉の桜』一九六一年）

（注）

joke　冗談。からかい。

芥（あくた）　ごみ。ちり。くず。

はすかい　ななめ。

（a）「ぼく」は何故このような場所で待ち合わせをしたのですか。

（b）この詩に見られるリズムの特色とその効果について解説しなさい。